

「仙台市議会議員の通信簿」の発表にあたって

2011年2月19日

議会ウォッチャー・仙台

代表 上原 仁

同 泉田 元子

1. なぜ、議会ウォッチャー・仙台の活動を始めたのか

議会ウォッチャー・仙台は、2008（平成20）年4月8日に発足した。2007（平成19）年8月22日の準備会の結成以来、相模原市議会をよくする会代表を講師に招いての勉強会の開催や、議会傍聴を続けるなかで発足にこぎつけたものであった。結成の母体となったのは、仙台市民オンブズマン・タイアップグループ（山田忠行会長）、美しい仙台を創る会（河村直人代表）、宮城地域自治研究所（高橋輝雄理事長）の3団体である。3団体は、それぞれに長く仙台市政に関心を持ち、市民の立場から市政の監視や、市政への提言活動等を精力的に行ってきた。中でも地下鉄東西線の建設については、今後の仙台市の財政に致命的な悪影響を及ぼすものとして、仙台市民オンブズマンの提起した訴訟に重大な関心を持ち続けた。訴訟自体は、行政に過大な裁量を認める裁判所の判断によって敗訴に終わったが、仙台市民オンブズマンが明らかにした需要予測のデタラメさは、3団体のメンバーも含め多くの市民の知るところとなった。開業後の乗車人員の過大予測は誰の目にも明らかなのに、このことを市民の代表である議会は、関連資料をもとに、とことん議論をしたであろうか。答は、否である。

本来議会は「議論の場」であるはずなのに、現状は「議論しない議会」になっている。なぜこのような議会になってしまったのであろうか。オンブズマンはいろいろな訴訟を提起し、議会に改革を迫っているが、一向に改善の兆しがない。議員の多くは何を言われようと、選挙に勝てばよいと高を括っているのではないか。こうした状況の下では、もっと別の形の監視方法も考える必要があるのではないか。特に選挙後の議会を議員任せにして、日常的に議会をチェックしてこなかった市民にも大きな責任があるのではないか。

こうした声を受けて、前記の3団体はこれまでの活動をバージョンアップすべく「議会傍聴活動等を通して、議会・議員を住民の立場から監視、評価し、住民に開かれた、住民の意向の反映される議会をつくりあげること」を目的として、議会ウォッチャー・仙台を設立したわけである。

設立後、傍聴環境の改善を求める活動を行うとともに、2008（平成20）年4月から今日まで、ほとんど全ての本会議、委員会（常任委員会、調査特別委員会、予算・決算等審査特別委員会）を、約20人のメンバーが日程を調整しながら傍聴し、質問内容や議員の態度等のチェックを行った。2008年4月から2010（平成22）年12月までに行われた本会議、委員会の日数はおよそ400日であるが、これらを傍聴した議会ウォッチャーのメンバーは延べ850人を数える。活動を続ける中で、傍聴者の顔ぶれも次第に当初の3団体の枠を越えて広がりつつあるが、特に心強いのは、リタイアされた方々の積極的な参加である。豊かな人生経験に裏打ちされた、ねばり強い活動と鋭い観察力は、私たちの活動の幅を大きく広げてくれるものでもあった。傍聴活動とともに、この間私たちが取り組んできたのは、今期議員の初議会であった2007（平成19）年第2回定例会（平成19年6月14日開始）から2010（平成22）年第2回定例会（平成22年6月23日終了）までの全ての一般質問、代表質疑について、議事録に基づいてその内容を評価する作業である。学ぶべき前例のない作業だけに、試行錯誤の連続であったが、何

とかゴールにたどり着くことができた。議場での議員の態度および質問内容についての評価結果は、章をあらためて詳述することにしよう。